

## 帰還困難区域を通過して

2014年2月4日

筒井哲郎

1月29日に福島第一原発西側約2kmを走る国道6号線を通って浪江町請戸の海岸を見学して来たのでご報告する。

知り合いの新聞記者から、原発周辺の帰還困難区域を見に行くので一緒に行かないかと誘われた。喜んで同行させてもらった。最近立ち入り制限区域が半径5kmくらいに狭められたことを聞いていたので、昨年7月に檜葉町のJヴィレッジまで行ったあとどうなっているだろうかと気になっていた(注1)。

前日の午後上野から特急「スーパーひたち」に乗り、夕方いわき駅近くのビジネスホテルに入った。いわきの宿はどこも原発労働者でいっぱいなかなかホテルの予約が難しいという。立ち入り制限区域に入るにはその区域の自治体の許可が必要で、先乗りしていたカメラマンが浪江町役場の許可をすでにとっておいてくださった。

翌朝9時、レンタカーに3人が乗り込んで出発。いわき中央ICから広野ICまで高速道路を走る。前後は工事関係者と見える車ばかり。天気は快晴で周りの山野が綺麗だが、人影がなく、寂しい感じがする。ICを降りたところが広野町と檜葉町との境あたりで、Jヴィレッジと広野火力発電所が目前のところ。Jヴィレッジの周りは今は閑散として人気がない。昨夏はここを拠点として日々3000人の人たちが働いているという賑わいを感じさせていたが、今は作業員の更衣室を原発敷地内の重要免震棟の脇に建てたり、作業終了後の人たちのスクリーニングを福島第二原発の入口に設けたりしているので、ここに人々が集中することはなくなっているらしい。それでも駐車場はいっぱいであった。

国道6号線を北上して、「道の駅ならば」に寄った。トイレ休憩のためである。道の駅は現在警察の駐屯所として使用されている。時刻は10時。閑散としていた。広場の一角にモニタリングポスト(放射線測定の大きな計測器)が据え付けられていて、0.何何 $\mu\text{Sv/h}$ という数値が大きな電光表示板に示されている。ところが、この数値が手元のハンディな測定器の数値の半分しかない。「いつもこうなんですよ」と、カメラマンがいう。

周辺の田んぼはグレーダーで表土を剥ぎ取られ、黒いフレコンバッグがそこそこにずらりと並べられている。このように高線量の東通りの除染より先に、中通りを着実に安全なレベルまで除染するという順序だてた作業が行われなかったために、莫大な除染費用が掛けられているのに効果が上がっていないという地元の人の苦情を最近聞いたばかりだ。さらに6号線を進むと、道路の法面の草木が削り取られ、土が露出しているところが少なくない。膨大な表土剥ぎ取りがそここで行われている。

富岡町から大熊町へ入る手前に検問所があり、車のナンバー、乗員3名の本人確認(運転免許証)が行われる。車内での放射線量は $3.7\mu\text{Sv/h}$ 。念のためマスクをする。双葉町の

原発が見えるあたりから浪江町の検問所出口までは、10 $\mu$ Sv/h を越える。

検問所を出たのが 11 時で、そこから右に折れて請戸川沿いの道路を進むと 3km ほどで海岸に出る。川原や田畑には、津波の爪痕がそのまま手付かずに、デコボコに傷ついた車や農機具、舟、家屋の残骸などが、草むらの中に今も放置されている。震災直後に他の地域の海岸で見た荒涼とした風景が今も生々しく残されている異常な風景であった。

海岸の波打ち際まで来ると放射線量が急に 1 $\mu$ Sv/h 以下に激減する。請戸の集落が完全に更地になっていて、家屋の土台のコンクリート基礎が道路沿いの草むらの中に点々と見える。生活道路の交差点に、黒御影石を刻んだ墓石風の造りの「東日本大震災慰霊碑」が建てられていて、花やペットボトル入りの飲み物などがたくさん供えられている。三人がこもごも手を合わせた。南の方角 5km の辺りに、福島第一原発 1 号機と 4 号機の屋根とその周りで働いているクレーンのブームが数本見える。

海岸沿いにコンクリート製の建物が残っていた。一番大きいのが請戸小学校である。2 階建ての立派な校舎と、体育館、そして水泳プールが完備している。校庭は高線量ガレキ置き場になっていて、重機やトラックが 10 台ほど動いて、校庭いっぱいガレキを積み上げている。体育館の正面ステージには、本番なのか予行演習なのか、卒業式の表示が貼られている。時計はどれも 3 時 38 分辺りを指して止まっている。

校舎の 1 階は津波が破壊して行って、ドアの枠が曲がり吹き抜けになっている。しかし、2 階の各教室はほとんど荒れていなくて、机や生徒たちの靴などがそのままに残っている。大きな黒板にはそこを訪れた先客たち（卒業生、自衛隊員、応援の警察官や消防署員たち）がそれぞれに励ましの言葉を寄せ書きしてある。

海岸の漁業施設も地区の集会所も立派な造りであったことが伺えるが、今は 1 階が波に破壊された状態で残っている。地元の人々が日中来た時のためにか、仮設のトイレがしつらえてあって、きれいに清掃が行き届いていた。

請戸川河口の左岸に 3 階建ての立派なマリン・センターがある。水族館・プラネタリウム・食堂があつて、小学生を連れた家族連れが 1 日ここで遊べるようになっている。1 階を津波が通り抜けたことは他の建物と同じだが、2 階と 3 階はそれほど荒れていない。広い駐車場も汚染土の水色のフレコンバッグがびっしり並べられていた。宮城県から来たという除染の作業員が二人車を止めて休んでいた。この建物の庭にも道の駅ならではの同じ仕様のモニタリングポストが据え付けられていた。そして数値を見ると、やはり手元のカウンターの値の半分の数値を示している。こちらは 3 人がひとつずつ持っているから、3 : 1 でこちらの方が正しいと言いたかったが、向こうは大掛りの測定器なのでかなわないと思い、首をかきあげたけど深く考えなかった。ところが、数日後に見た『週刊朝日』の記事が、「50 億円近い費用を投入したにもかかわらず、この装置は実際の放射線量よりも低い数字が出ると地元住民のあいだで評判が悪い。独自測定すると、最大 4 割超も低く、そのデータが判明した」と告発していたので（注 2）、「やはり」と驚いた。技術的には、大きな設備なので地面を掘り起こしてコンクリートの基礎を作り、機器をフェンスやパネルで

囲っているために、元々の地上の放射性物質をどかして除染と同じことを行い、かつセンサーを金属で囲っているのが放射線を遮蔽しているのと同じ結果になっているという。わたしが目で見た現実もまさしくその通りであった。ひどい話だが、この測定を管理しているのは原子力規制委員会であるという。単純な土壌からの放射線測定もまともにできない人たちがどうして原子炉の安全規制をできるのだろうか。

午後もだいぶ回ってから帰路についた。通行管理のゲート 2 箇所を逆向きに通らず、その先の福島第二原発に立ち寄った。ここでスクリーニングを受けることが義務付けられているからだ。大きな仮設のテントを張った 4 棟の通り抜けのヤードがあり、そこで、車も人もガイガー・カウンターで表面をくまなく測定され、もし規定値を超えていたら除染するという手順になっている。来る前には、「靴が汚染されて水洗い（除染）しても線量が下がらない場合があるから、捨てても良い靴を履いてきてください」と言われていたので、古めの靴を履き、バッグの中に代わりの靴を入れてきていたが、3 人とも引っかからなかった。

それからしばらく国道 6 号線を南下して、道端のラーメン屋さんで昼食をとり、いわき駅で 16 時台の特急「スーパーひたち」に乗った。

省みると、請戸の浜を観察していた昼頃は、空が抜けるような青空で、海は紺青の穏やかな海面が水平線までくっきりと見渡せる小春日和であった。しかるに陸側に目を転じると、田んぼの中にひしゃげた車やガレキが散乱して津波の爪痕がそのままに残っている。そして人影が無い閑散とした平野の向こうに原発の高い屋根が木々の上にてっぺんを覗かせている。自然の環境と人為の荒廃が対象を為すあまりに不釣り合いな落ち着かない空間であった。

注 1. 「その 7 J ヴィレッジからいわきの海岸へ」

<https://sites.google.com/site/tsutsuishinbun/259/j-village-kara-iwaki-no-kaigan-he>

注 2. 「国の放射線測定の日々を暴く」『週刊朝日』2014 年 2 月 14 日号